

日本人の海外移住と日本語教育支援政策

—応用言語学とグローバル・ヒストリーの接点を探る—

(要旨)

本 林 響 子*

本発表は、「日本人の海外移住と日本語教育支援政策」と題し、副題を「応用言語学とグローバル・ヒストリーの接点を探る」として、日本人の海外移住と海外移住者に対する日本政府の支援を事例として取り上げつつ、応用言語学研究からグローバル・ヒストリーにどのような貢献ができるのかについて検討した。

発表の前半では、応用言語学および社会言語学の概要、特に近年の社会論的応用言語学で顕著に見られる、ミクロの相互行為、マクロの制度的言説、そして両者の相互作用および緊張関係に関する研究の動向を説明した。そして、グローバル・ヒストリーと応用言語学の接点を探る試みとして、「言葉が移動するとはどういうことか」という問いが両分野の学問的好奇心を満たす一つの切り口になるのではないかとすることを論じた。言語とその話者がどのように移動、越境するのか、そしてそれがどのような言語的、社会的帰結をもたらすのかについての研究は近年多く行われている。とりわけ近年の潮流として、個々人が話す「わたくし」の「ことば」がどのように「制度」や「社会的言説」に影響を受けているか、また、個々人の言語意識や言語使用、すなわち言語に関する様々な判断とそれに基づいた行動が、言語の制度的側面をどのように支えたり、再生産したり、あるいはゆるやかに変化させていたりしているのかという点に関しての研究が盛んになってきている。「言語」の「移動」や「越境」に関して、制度化された「国語」や「移民の言語継承」等「民族アイデンティティ」との結びつきに着目する研究がある一方、ある特定の言語の経済性に着目し、

「商材」としての言語の流通に着目する研究が他方に存在する。本発表では、上述のような社会論的応用言語学における動向と、グローバル・ヒストリーの特徴として挙げられる国際性、扱う地域や空間の広さ、学際性及び新奇性のあるテーマへの寛容さなどに親和性があることを指摘し、両分野の接点を探るとともに、「人の移動」、「モノの移動」に並んで「言語の移動」という現象もまたグローバル・ヒストリーの議論の中に位置付けられるのではないかという可能性を示した。言語の移動については、おそらく人の移動、モノの移動と同じような側面がある一方、言語特有の性質から、必ずしも人やモノの移動と同じではない部分もあり、興味深い議論ができるのではないかと考えられる。

これらの議論を踏まえ、発表後半では、「日本から南米へ移住した移住者」への「継承日本語支援」と言われる枠組みでの日本語教育支援プログラム、具体的には国際協力機構による「日系日本語学校教師」の派遣を事例として、「言葉の移動」及びその影響について論じた。外交青書、審議会資料、国際協力機構報告書等を資料として、これら政策文書の中で「移住者」や「日系人」がどのように表彰されているかを検討した上で、「移住者」の地理的移動（「移住」）や移住先での言語の「継承」への希求と努力、外交青書・審議会資料より明らかになった日本政府による移住者・日系人支援の歴史的変遷、そしてその枠組みの中での「日本人日本語教師」の地理的移動（「派遣」）、といった要素が複雑に絡み合っ「言葉の移動」が達成・維持されており、同時に、「言葉の移動」が様々な政策の一部を遂行しているということが言えることを論じた。

*お茶の水女子大学助教

